

# 小山田古墳の被葬者をめぐって

小澤 毅

## 1 小山田古墳の発見

**巨大方墳の確認** 2015年1月、新聞各紙は、奈良県明日香村川原<sup>あすか かわはら</sup>で貼石・敷石と板石積みをともなう大規模な掘り割り遺構が発見されたことを一斉に報じた。検出された掘り割りは直線をなし、調査した範囲で長さ約48mにおよぶ。底面の敷石とその北側の貼石にはおもに石英閃緑岩が用いられ、掘り割りの南側は下の2段に結晶片岩(緑泥片岩)の板石、その上は「榛原石」と通称される室生安山岩<sup>むろう</sup>の板石が積まれていた(図1)。調査を担当した奈良県立橿原考古学研究所は、これらを削平された古墳とその北辺の掘り割りとみて、板石積みを墳丘下段北辺の裾とする一辺50m以上の方墳を想定する<sup>1)</sup>。

**築造年代** 貼石にともなう造成土からは6世紀後半の土器類、掘り割り埋没時の流入土からは7世紀後半の土器が出土しており、年代の一端をうかがわせるが、掘り割りは築造後ほどなく埋没したらしい。そして、室生安山岩や結晶片岩の板石が7世紀中頃の寺院や古墳に多用されていることから、現地説明会資料や調査概報は、掘り割りが7世紀中頃に構築された可能性を考える。

**舒明天皇との共通性** たしかに、この遺跡における室生安山岩の板石積みが<sup>じよめい</sup>舒明天皇陵(「押坂陵」、『延喜諸陵寮式』の「押坂内陵」)に治定されている段ノ塚古墳<sup>だんのつか</sup><sup>2)</sup>(八角墳、桜井市忍阪)と共通する事実は、年代を考えるうえできわめて重要であろう。『日本書紀』によれば、舒明天皇は641年10月に死去し、642年12月に「滑谷岡」に葬られたが、翌643年9月には押坂陵に改葬されている(以下、とくに典拠を記さない場合は『日本書紀』による)。この改葬後の押坂陵が段ノ塚古墳であることは、学界でも異論がない。とすれば、同じ室生安山岩の板石積みをともなう墳丘がほかに知られていない以上、今回発見された古墳がそれと年代的に近接するとみるのはごく自然だからである。

**舒明初葬説** そうした成果を受けて、奈良県立橿原考古学研究所長の菅谷文則氏は、年代および墳丘構造の一致を理由に、この遺跡を舒明天皇の初葬陵と推定する<sup>3)</sup>。従来、初葬地である滑谷岡の場所は不詳であったが、新発見の古墳が「滑谷岡陵」に該当し、翌年には押坂陵に改葬されたとみるのである。

「小山田古墳」 その当否はさておき、従来知られていなかった巨大な方墳の存在が発掘調査で判明した意義は大きく、今後、古代史上における位置づけや、被葬者を含めた遺跡の性格をめぐって、活発な議論が展開することが予想される。

なお、この遺跡については、古墳ではなく、居館などほかの施設の可能性を想定する見方なども散見したが、遺跡が立地する尾根の幅を勘案すると、居館を設けるには面積的に狭小にすぎる。また、ここを含む西方および南方の一带は、古墳が多数集中する墳墓地域であって、居館を営むのにふさわしい場所とはいいがたい。以上の理由から、本稿では古墳であることは確実と考え、「小山田古墳」と呼ぶことにする<sup>4)</sup>。

問題の所在 しかし、これを舒明天皇の初葬陵とする想定は正しいのだろうか。この点に関して重視しなければならないのは、掘り割りが築造後ほどなく埋没しているという事実である。当然、それは墳丘の削平とも連動していた可能性が高いが、だとすると、大量の労働力を投入して築造した古墳を、さしたる時間もおかずに、わざわざ破壊したことになる。再び大規模な動員をかけてまで、そうせざるをえなかった理由は何だったのか。舒明初葬陵説に立った場合、はたしてそれを説明しうるのか。いずれにしても、小山田古墳の被葬者を推定するうえで、この問題を避けて通ることは



図1 小山田古墳の北辺（北東から）

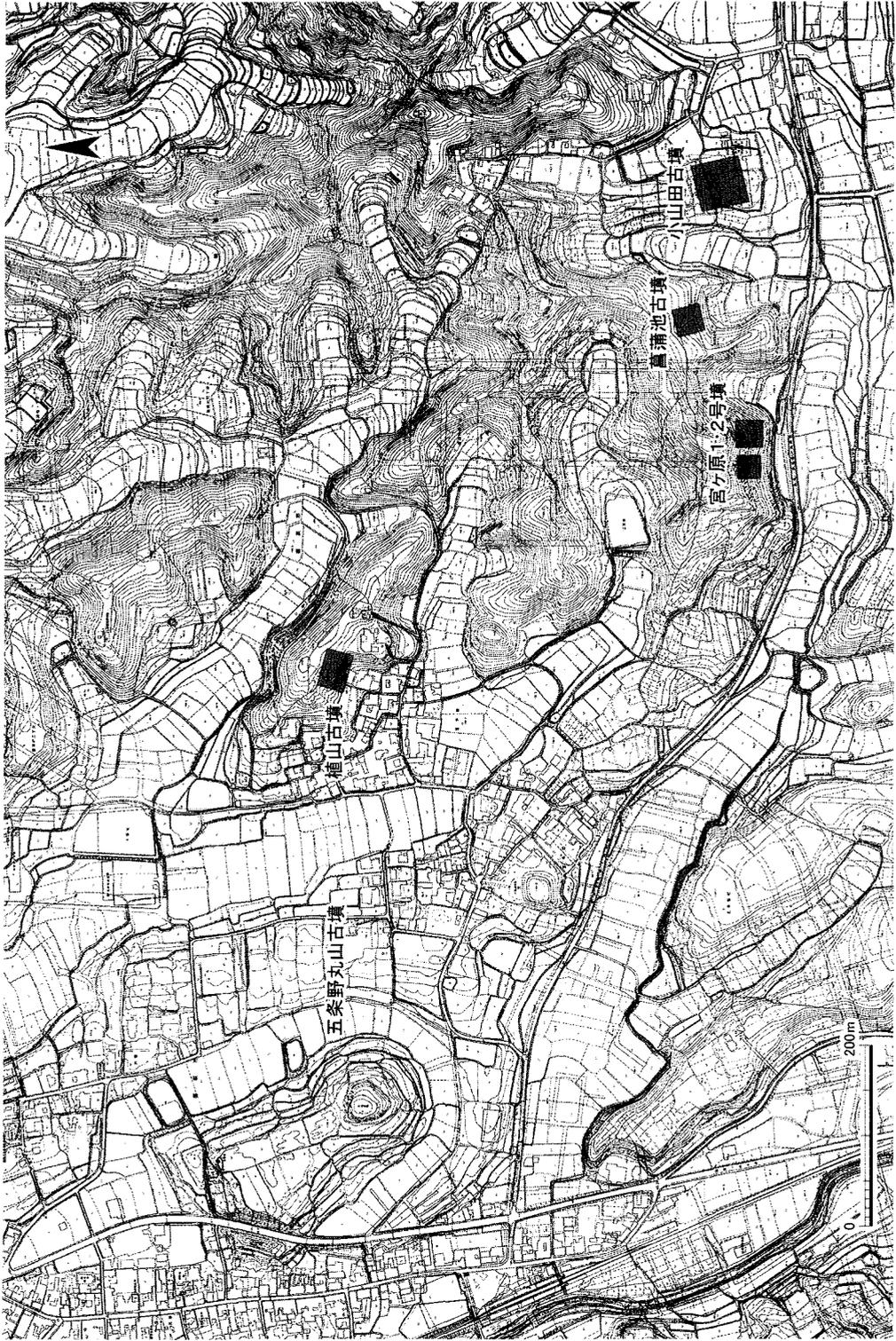


図2 小山田古墳と周辺の古墳



図3 五条野周辺の空中写真（1955年）（左が北）

できず、ここに解決の鍵があると考ええる。以下、周辺の遺跡の状況をふまえつつ、あらためて検討してみよう。

## 2 大野岡（甘櫛岡）周辺の遺跡群

**小山田古墳の位置** 小山田古墳は、北北西から南南東へのびる尾根の先端部付近に占地し、その東西は、両側とも谷が深く入り込んでいる（図2・3）。これを含めて、古墳の背後は樹枝状の谷が数多く発達した東西1.3km、南北1.1kmほどの丘陵地帯となっており、その東北端近くに現在の甘櫛丘万葉展望台がある。

**大野岡と甘櫛岡** 「甘櫛岡」<sup>5)</sup> に関しては、644年11月に蘇我蝦夷と入鹿の父子が「上の宮門」「谷の宮門」と称した邸宅をならべ起てたと見え、小山田古墳から北東約0.5kmの「甘櫛丘東麓遺跡」で確認されている遺構群<sup>6)</sup> がそれらの一角にあたる可能性は高い。

ただし、『古事記』推古段は、遺詔によって628年9月に息子の竹田皇子と合葬された推古天皇について、「御陵は大野岡の上に在りしに、のちに科長の大陵に遷しき」と記す。そして、小山田古墳の北西約0.7kmに位置し、時期を異にする二つの横穴式石室をもつ方墳（長方墳）の植山古墳<sup>7)</sup> が、推古初葬陵であることは確実視される<sup>8)</sup>。また、蝦夷の父である蘇我馬子は、585年2月に「塔を大野丘の北に起て」と見え、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』はその場所を「止由良佐岐」とする。したがって、小山田古墳の背後、豊浦寺南方から植山古墳の一带に広がる丘陵は、「大野岡」または「甘櫛岡」と呼ばれたと考えてよい。「甘櫛岡」が東寄りの部分の呼称であることは動かないので、「大野岡」は主として西寄りの部分に対する呼称か、丘陵地帯全体の総称であったのだろう。

では、小山田古墳が築造されたとみられる7世紀中頃までに、大野岡（甘櫛岡）周辺にはどのような施設が営まれていたのか。以下、主なものを東北の端から時計回りに瞥見してみたい<sup>9)</sup>（図4）。

**向原の家と豊浦の蘇我邸** まず、その東北麓には、馬子の父である蘇我稻目の邸宅が存在した。仏教公伝にさいして受容に賛同した稻目は、仏像を拝領して「小墾田の家」に安置し、「向原の家」を寺としている（欽明13年10月条）。「向原の家」は豊浦寺およびその近辺と推定され、592年12月に即位した推古天皇の豊浦宮も、蘇我氏の邸宅の一部を利用した可能性が大きい<sup>10)</sup>。一帯には、稻目の「向原の家」以来、邸宅が蘇我本宗家に代々伝えられ<sup>11)</sup>、蘇我蝦夷も「豊浦大臣」と呼ばれたように、そこを最大の拠点としていたと考えられる。

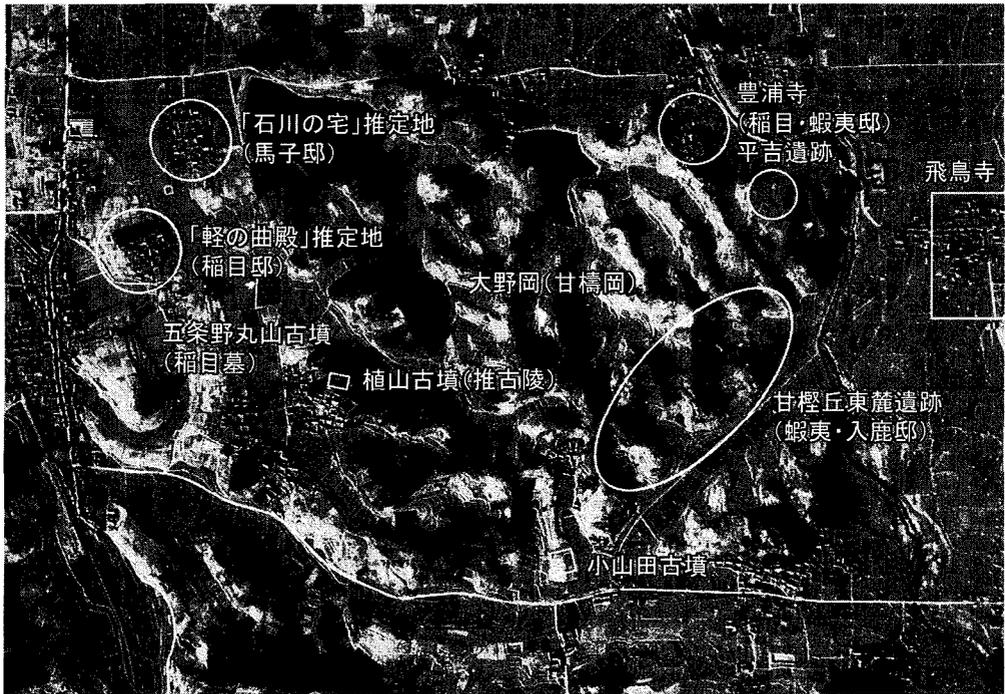


図4 大野岡（甘櫛岡）周辺の遺跡群

飛鳥寺と甘櫛岡の「上の宮門」「谷の宮門」 また、丘陵東端から約 0.2 km 東には、  
あすかであら  
 飛鳥寺（法興寺）の伽藍がそびえ立つが、588 年に発願されたこの日本最初の本格的  
 寺院は、蘇我氏の氏寺（僧寺）として建設され、豊浦宮の跡地に建立された豊浦寺（尼  
 寺）と対をなした。645 年 6 月の乙巳の変にさいしては、なかのおおえのみこ  
 中大兄皇子たちが飛鳥寺に  
 入って城とし、甘櫛岡の蘇我氏の邸宅に対抗している。こうした点からも、蝦夷と入  
 鹿の邸宅「上の宮門」「谷の宮門」は飛鳥寺の近辺に存在したことがうかがえるが、  
 それが「甘櫛丘東麓遺跡」を含む一帯に想定できることはすでに述べたとおりである。

植山古墳 一方、小山田古墳の北西には、上述の推古天皇の初葬陵とみられる植山  
 古墳がある。彼女は、蘇我稲目の娘の堅塩媛（きたしひめ 欽明の妃、生没年不詳）を母とし、蘇我  
 馬子は叔父にあたる（図 5）。つまり、子の竹田皇子ともども蘇我氏の一員であって、  
 彼女自身、「朕は蘇何（蘇我）より出でたり」と明言している（推古 32 年 10 月癸卯条）。  
 よって、蘇我系の陵墓と位置づけることができよう。

五条野丸山古墳 植山古墳の西方約 0.4 km には、奈良県最大の前方後円墳であり、  
 28.4m（以上）という日本最長の横穴式石室をもつごじょうのまるやま五条野丸山古墳<sup>12)</sup> が、長さ 310m  
 に達する巨大な墳丘を横たえている。両者はまさに指呼の間にあり、一連の墓域に営  
 まれたとの感を強くいだかせる。なお、この古墳については、大王（天皇）陵と考え、

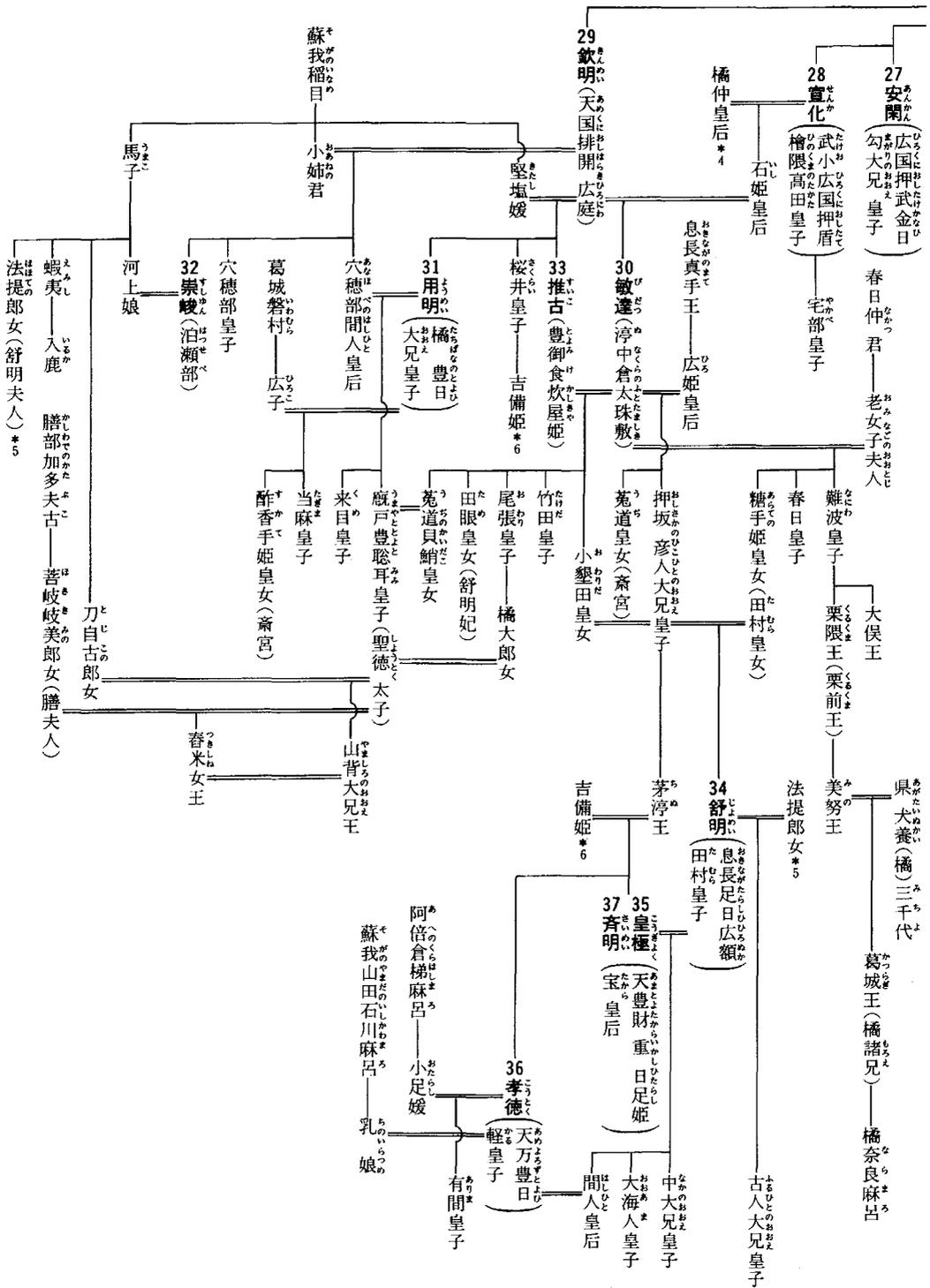


図5 関係系図

欽明（571年没）を被葬者とする見解が早くからあった<sup>13)</sup>。また、近年は、その立場にたつて、欽明の「ひのくまのさかいのみささき檜隈坂合陵」の「坂合」を五条野丸山古墳周辺の地名とし、梅山うめやま（ひらた平田梅山）古墳（墳丘長約140mの前方後円墳）を敏達びだつ（585年没）の未完成陵とみる説も提示されている<sup>14)</sup>。

しかし、欽明陵に関しては『日本書紀』をはじめとする史料が比較的豊富に残っており、それらの記述は正しく梅山古墳に合致する、という事実をまず重視する必要がある。そして、のちに天武・持統てんむ じとう陵（「大内陵」、『延喜諸陵寮式』の「檜隈大内陵」）と文武もんむ陵（『続日本紀』の「ひのくまのあこのみささき檜隈安古山陵」）が加わるものの、推古朝の段階に「檜隈」を冠した陵名は、欽明陵以外に確認できない。とすれば、『日本書紀』が天皇およびそれに準ずる皇族の「陵」とその他の「墓」を明確に書き分けている<sup>15)</sup> こととあわせて、欽明紀の「檜隈坂合陵」と推古紀の「檜隈大陵」「檜隈陵」は、すべて同じ欽明陵を指すと考えざるをえない<sup>16)</sup>。これを史料の混乱として片づける<sup>17)</sup> のは、あまりにも無理がある。

また、敏達は591年4月に母の石姫いしひめ（欽明のおおきさき太后）の「磯長陵」に合葬されるが、それに先立って敏達陵が檜隈に造営され、かつ途中で放棄されたというのは、史料の裏づけを欠く想像にすぎない。何よりも、実際に埋葬がおこなわれていない古墳が「檜隈陵」と記され、陵としての扱いを受ける理由は認めがたいのである。くわえて、檜隈が丘陵地帯であることを勘案すれば、「坂合」などの地名が五条野丸山古墳周辺にかぎられる必然性はなく、そこが当時檜隈とよばれた証拠とはならない。むしろ、地形や当時の交通路との関係からも、檜隈の北限は五条野丸山古墳までおよんでいなかった可能性が高く<sup>18)</sup>、梅山古墳が欽明陵であることは否定しえないと考える。

すると、あらためて浮かび上がるのは、史料上、五条野丸山古墳に該当する大王陵は見当たらない、という事実であり、これは被葬者が大王ではなかったことを強く示唆する。また、五条野丸山古墳の玄室には二つの家形石棺が置かれ、通常と異なって、奥棺が形式的に新しく、前棺が古い様相を呈している。この点について、「五条野丸山古墳＝欽明陵説」は、奥棺を堅塩媛（612年2月の改葬時）、前棺を欽明のものとするが、大王である欽明の棺を脇に押しつけて、堅塩媛の棺を奥に据えるという行為は想定しがたい<sup>19)</sup>。一方、前棺の主が大王以外の豪族であれば、欽明の妃となった堅塩媛を格上として扱い、玄室の奥に据えたと考えて無理なく理解できる。一帯が、次に述べる蘇我稻目（570年没）の邸宅があった蘇我氏の本拠地の一つであることとあわせて、被葬者は蘇我稻目とその娘の堅塩媛（初葬時、612年2月に欽明陵へ改葬）とみるのが至当だろう<sup>20)</sup>。

ちなみに、墳丘の規模の大小は、被葬者が有した権力の大きさをそのまま反映するわけではない。同時代最大の古墳は大王陵である、という仮説は一般に受け入れられているけれども、何ら実証をへているわけではなく、すべてがそうだとするのは単純にすぎる。また、大王陵にも生前の造墓によるものが多く含まれる可能性は高いが、それがどの時点でなされたかを確定するすべはなく、全部が即位後の築造と断ずることもできない。とすれば、大王位の継承順位が不安定な状況下では、予定外の人物の即位や王位継承候補者の不慮の死を含めて、大王陵が同時代最大の古墳でありつつけるのは、事実上不可能に近いのである<sup>21)</sup>。個々の造宮の実態やそれにいたる経緯を考慮せずに、同時代最大の古墳は大王陵であるはずだと考えるのは、たんなる思い込みでしかない。

むしろ、6世紀の大王陵が明らかに規模を縮小するなかにあつて<sup>22)</sup>、異常ともいえる規模をもつ五条野丸山古墳の特異性にこそ目を向けるべきであろう。6世紀後半の大王家にとって、壮大な墳丘を築く必要性はもはや失われており、巨大な古墳を築造することで力を誇示する意義があつたのは、被葬者ないし造宮者が大王以外の豪族であるがゆえと考えられるのである。

**軽の曲殿** 五条野丸山古墳のすぐ北方には、7世紀後半に<sup>かるでら</sup>軽寺が営まれた台地が南東から北西方向へのびている。古代以来の地名「軽」の遺称地であり（現在は<sup>かしはら</sup>橿原市<sup>おおがる</sup>大軽町）、蘇我稲目の「<sup>まがりどの</sup>軽の曲殿」（欽明23年8月条）は、地形から見て、この台地上に存在したと推定される（用明2年4月丙午条に見える蘇我馬子の「<sup>つきくまのいえ</sup>槻曲家」も、同じものを指す可能性がある）。

**石川の宅** さらに、台地から谷を隔てた北東方向には、大野岡の丘陵末端からつづく微高地が広がる。ここも古代以来の地名「<sup>いしかわ</sup>石川」の遺称地であつて（現在は<sup>いへ</sup>橿原市石川町）、蘇我馬子が<sup>いへ</sup>仏殿をつくつたと記される「石川の宅」（敏達13年是歳条）が存在したと考えられる。

**大野丘（岡）の北の塔** 先述のように、蘇我馬子は、585年2月、大野丘の北に<sup>だいえ</sup>仏塔を起てて大会の設齋をおこない、塔の柱頭に<sup>いへ</sup>仏舎利をおさめている。その詳細な位置は不明だが、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』が場所を「止由良佐岐」とする点とあわせて、豊浦にほど近い大野岡の北麓とみてよい。同書が583年（癸卯年）に「<sup>むくはら</sup>牟久原殿」を<sup>さくらい</sup>楷井（桜井）に移して道場としたと記す桜井道場も近辺に想定できる。

**蘇我氏の勢力圏** 以上のように、大野岡（甘櫛岡）とその周辺は、蘇我氏の邸宅や氏寺、蘇我系の陵墓が集中し、完全に蘇我氏の勢力圏としての様相を呈していた。また、これ以外にも、蘇我馬子は「<sup>あすかがわ ほとり</sup>飛鳥河の傍」に家を構えて（推古34年5月丁未条）、「<sup>しまの</sup>嶋

大臣おおおみ」と呼ばれており、蘇我蝦夷は「畝傍うねびの家」(皇極元年4月乙未条)と「畝傍山の東」の家(皇極3年11月条、「畝傍の家」とは別)を営んでいる。稲目から入鹿にいたる蘇我本宗家の邸宅とそれにかかわる呼称を整理すると、次のとおりである。

蘇我稲目：小墾田の家、向原の家、軽の曲殿

蘇我馬子：飛鳥河の傍の家、「嶋大臣」、槻曲家、石川の宅

蘇我蝦夷：「豊浦大臣」、畝傍の家、畝傍山の東の家、上の宮門(甘櫛岡)

蘇我入鹿：谷の宮門(甘櫛岡)

したがって、6世紀後半以降、畝傍山東方の軽・石川から大野岡(甘櫛岡)、豊浦、飛鳥、さらに島庄しまのしょうにかけての一带が、蘇我氏の本拠となっていたことは間違いない。注目されるのは、その範囲に含まれるか、少なくともごく近接する位置に小山田古墳が営まれた、という事実である。この点は、被葬者を考えるうえできわめて重要といえよう。

### 3 蘇我系の(陵)墓域と非蘇我系天皇・皇族の陵墓域

**蘇我系の(陵)墓域** ここで、蘇我系の(陵)墓域と、非蘇我系を中心とする天皇・皇族の陵墓域について整理しておきたい。じつは、小山田古墳が誰の墓かを推定するさいに、こうした視点は不可欠であるにもかかわらず、十分に認識されていないと思われるからである。そして、それはとりもなおさず、五条野丸山古墳の被葬者を欽明とする誤解に端を発している。

しかし、前節で述べたように、五条野丸山古墳を蘇我稲目と堅塩媛(初葬時)の墓とみれば、この古墳は、推古天皇の初葬陵(竹田皇子との合葬陵)である植山古墳とともに、蘇我氏の勢力圏のただなかに営まれたものと理解できる。蘇我馬子の「桃原墓ももはらのほか」(推古34年5月丁未条)は、彼の邸宅から目と鼻の先の石舞台古墳いしぶたいに比定されるが、同様に、蘇我稲目の墓も軽の曲殿の間近に営まれたのであろう。類似した状況は、多少の距離の差こそあれ、推古初葬陵と豊浦宮・小墾田宮おほりだのみやの関係にも見てとれる。蘇我系の(陵)墓は、生前の住まいに比較的近接した場所に造営される例が多かったのではないか<sup>23)</sup>。

ともあれ、植山古墳が位置する大野岡(甘櫛岡)から五条野丸山古墳にかけての一带は、蘇我系の(陵)墓域であったと考えてよい<sup>24)</sup>。上記以外でこれに含まれるおもな古墳としては、菖蒲池古墳しょうぶいけ、宮ヶ原1・2号墳みやがはら(消滅)などがある。

**非蘇我系天皇・皇族の陵墓域** 一方、その南側には、五条野丸山古墳の南から小山田古墳の南へつづく東西方向の明瞭な谷地形があり(これは小山田古墳の東で二つに分岐

し、一つはそのまま東方の川原寺・橋寺方面へ、もう一つは北東の甘檜丘東方遺跡方面へと伸びる)、それを隔てた南方の丘陵が、おもに非蘇我系の天皇・皇族の陵墓域となっていた。

まず、五条野丸山古墳の南方約 0.7 km には、先述の梅山古墳(欽明陵)が位置する。そして、この東方約 0.6 km に八角墳の野口王墓古墳<sup>25)</sup>(天武・持統陵)があり、両者の間には、東から鬼の俎・廁古墳(長方墳)、金塚(カナヅカ、平田岩屋)古墳(方墳)がほぼ東西に並んでいる。さらに、梅山古墳の南西約 0.3 km には、精美的な切石積み横穴式石室をもつことで有名な岩屋山古墳(八角墳か)があり、一連の陵墓域に属するものとみられる。

すでに述べたように、梅山古墳が現在の治定どおり、欽明陵であることは動かない。また、野口王墓古墳も、鎌倉時代の盗掘時の実検記である『阿不幾乃山陵記』<sup>26)</sup>により、天武天皇(686年没)と持統天皇(702年没)を合葬した「大内陵」と確定できる。この古墳は 687 年 10 月に造営が開始され、翌 688 年 11 月に天武が埋葬された。その後、703 年 12 月には、天皇として初めて火葬に付された持統が合葬されている(『続日本紀』大宝 3 年 12 月壬午条)。

鬼の俎・廁古墳は、長方形の墳丘内に東西二つの横口式石槨をおさめていたと復元される。石槨の規模にはやや違いがあり、現地に床石(「鬼の俎」と転落した蓋石(「鬼の廁(雪隠)」)を残す西側の石槨のほうが大きい。被葬者は未詳だが、西光慎治氏は、斉明天皇(661年没)を遺詔によって孫の建王と合葬した初葬陵と推定する<sup>27)</sup>。ちなみに、斉明については、667 年 2 月に娘の間人皇女(孝徳天皇の皇后)と「小市岡上陵(『延喜諸陵寮式』の「越智岡上陵」)に合葬され、陵前の墓に孫の大田皇女を葬ったことが見える。この「小市岡上陵」が、前面に小型の横口式石槨(越塚御門古墳)をともなう牽牛子塚古墳<sup>28)</sup>(八角墳)であることは疑いない<sup>29)</sup>。

金塚古墳は、1890 年に墳丘と石室が破壊されたが、当時の記録から、精美的な切石積み横穴式石室を有していたことが知られる<sup>30)</sup>。643 年 9 月に死去し、同月「檀弓岡」に葬られた吉備姫王<sup>31)</sup>(斉明天皇の母)の墓とみてよい。「檀弓岡」(真弓の岡)は、梅山古墳の南西の一带(明日香村真弓)を含む丘陵の総称であろうが、野口王墓古墳の南側にも「真弓田」「真弓細田」などの地名が残るので、金塚古墳周辺も含んでいたと考えて矛盾はない。また、『延喜諸陵寮式』は彼女の「檜隈墓」を「檜隈陵域内」と記しており、「檜隈陵」は、その前段に記載された欽明の「檜隈坂合陵」を指す。ほかに該当する古墳が見当たらないことから<sup>32)</sup>、北浦定政が『打墨縄』(嘉永元年〔1848〕刊)で考定したごとく、金塚古墳が「檜隈墓」であるのは確実である。

岩屋山古墳は、二段築成の墳丘をもち、下段は方形をなすが、西半部が大きく削られているため、上段の墳形を確定できない。しかし、現存する墳丘の東南辺は明らかに石室の主軸方向と斜交しており、上段部分は八角墳となる可能性が高い<sup>33)</sup>。斉明天皇の初葬陵とする説も提示されているが<sup>34)</sup>、この比定には疑問があり、被葬者の問題については、のちにあらためて触れることにしたい。

**対峙する蘇我系と非蘇我系の（陵）墓域** 以上のように、蘇我系の（陵）墓域と、非蘇我系を中心とする天皇・皇族の陵墓域は基本的に分離しており、東西方向の谷地形をはさんで、南北に対峙していた。この谷には、当時、東西方向の幹線道路が通り、宮殿がおかれた飛鳥の主要部に西方から入る重要な交通路として機能したと推定される<sup>35)</sup>。幹線道路が通る谷を境として、両者の（陵）墓域は明らかに異なっていたのである。この点は、小山田古墳の被葬者を考えるうえで、きわめて重要であろう。小山田古墳は、まさしく、その谷と幹線道路に面した北側の丘陵端部に築かれているのである。

#### 4 小山田古墳の被葬者

**蘇我氏の有力者** では、小山田古墳は誰の墓だったのか。先に二節にわたって検討したように、これが営まれた大野岡（甘櫛岡）周辺は明らかに蘇我氏の勢力圏であり、植山古墳（推古初葬陵）を含む丘陵地帯の西半部は、その（陵）墓域として機能していたとみられる。また、小山田古墳の北東には、蘇我蝦夷と入鹿の「上の宮門」「谷の宮門」が存在したと推定される。先述のごとく、蘇我系の（陵）墓は、生前の住まいに比較的近接した場所に造営される例が多かったとすれば、小山田古墳の被葬者は、近隣に邸宅を構えた蘇我氏の有力者と考えるのがもっとも自然であろう。

「**今来の双墓**」 すると、調査概報の想定どおり、古墳の築造が7世紀中頃とした場合、該当する人物としてまず想起されるのは、蘇我蝦夷である。彼は、645年の乙巳の変で入鹿とともに滅ぼされるが、それに先立ち、権力の絶頂にあった642年に生前造墓をおこなっていた。皇極元年是歳条は次のように記す。

ことごとく、あめのした おおみたから あわ ももやそのかきべ おこ あらかし ならびのはか いまき  
又 尽 に拳国の民、并せて百八十部曲を發して、預め双墓を今來に造  
り、一は大陵と曰い大臣の墓とし、一は小陵と曰い入鹿臣の墓とす。  
ひとつ おおみさぎき い おおみ こみさぎき いるかのおみ

この記事は、臣下の身でありながら国中の民を徴發したこと、自分たちの墓を、天皇にかぎった呼称である「陵」と称したことなど、彼らの専横なふるまいを非難し、無礼を具体的に列挙したなかの一部である。しかし、それだけに、蝦夷と入鹿の墓が

「双墓」と呼ばれるようなかたちで築造されたことは、事実と考えてよいだろう。「今来」については、高市郡の南半部がもと「今来郡」に属したことから、小山田古墳を含む一帯の呼称とみて支障はない。

従来、「今来の双墓」については、みどろみなみ 水南古墳・つかあな 水塚古墳（ごせ 御所市古瀬）こせ にあてて江戸時代以来の説のほか、ますだのいわふね 益田岩船（みせ 樫原市見瀬町）を候補とする説<sup>36)</sup>、梅山古墳と金塚古墳に比定する説などが提唱されていた<sup>37)</sup>。しかし、水南古墳・水塚古墳は年代的に合致せず、益田岩船も大陵・小陵からなる双墓にはそぐわない。梅山古墳や金塚古墳が該当しないことは先述のとおりである。

**蘇我蝦夷の「大陵」** それに対して、今回確認された小山田古墳の壮大な規模の墳丘は、まさに、絶大な権勢を誇った彼が「小陵」とともに造営した「大陵」にふさわしい。また、用明（587年没）以降の蘇我氏の墓および蘇我系の大王（天皇）陵は、石舞台古墳や植山古墳（推古初葬陵）、やまたたかつか 山田高塚古墳（推古改葬陵、『延喜諸陵寮式』のしながの「磯長山田陵」、大阪府南河内郡太子町）、やまだのみさぎ 春日向山古墳（用明陵、「河内磯長陵」、593年9月に改葬、大阪府南河内郡太子町）など、基本的に方墳である事実とも整合する。さらに、室生安山岩の板石積みをとまなう墳丘構造が、643年9月に舒明天皇を改葬した段ノ塚古墳（押坂陵）と共通し、同様の例がほかに認められないことは、両者が年代的に近接することを強く示唆する<sup>38)</sup>。小山田古墳は蘇我蝦夷の「大陵」とみるべきであろう。

そう考えれば、この古墳が築造後ほどなく、意図的に削平された理由は容易に説明がつく。蘇我蝦夷と入鹿の専横を象徴する構築物でもあった「今来の双墓」とりわけ「大陵」が、乙巳の変後、破壊の対象となったことは想像に難くない。それは、改新政府にとって、蘇我氏への懲罰と見せしめのために、大規模な動員をかけてでも破壊しなければならないものだったはずである。「大陵」が削平されたのには、充分な理由が存在したのである。ちなみに、改新政府は「蘇我臣蝦夷と鞍作（くらくり入鹿）かばねが屍を墓に葬ることを許し」ているが（皇極4年6月己酉条）、「今来の双墓」への埋葬を許したとはとうてい思われない<sup>39)</sup>。

**舒明初葬陵説の問題点** 一方、これを舒明天皇が642年に葬られた初葬陵とみる説はどうか。舒明は翌643年に押坂陵へ改葬されているが、問題となるのは、改葬後に主のない状態になったとはいえ、初葬陵を削平したり、墳丘の板石積みを解体して運んだりすることがありえたか、という点である。結論からいえば、天皇陵は、たとえばかへの改葬によって被葬者がいなくなったとしても、意図的な削平や解体を受けることはなかったと考えられる。

これについては、推古の初葬陵であることが確実な植山古墳の状況が参考となるだろう<sup>40)</sup>。植山古墳では、改葬によって被葬者がよそへ移されたのち、東西の両石室ともに、石室前面を閉塞土で丁寧に埋め戻し、完全に封印していた。さらに、少なくとも墳丘の背後には塀とみられる柱列をめぐらせ、立ち入りを許さないよう厳重に保護している。しかも、柱列には2時期あり、新しいほうの柱列は藤原京期(694~710年)頃と推定される。この長期間にわたって、被葬者のない状態でも、天皇の初葬陵はきちんと維持・管理されていたのである<sup>41)</sup>(図6)。

とすれば、舒明を押坂陵に改葬したのち、主がいなくなったからといって、初葬陵を削平したり、板石積みを解体して運んだりしたとは考えがたい。また、墳丘の形態自体も、押坂陵は前面に方形壇をともなう八角墳であって、小山田古墳が方墳であるのとは異なる。天皇陵は舒明以降、八角墳へ移行するが、こうした点においても、小山田古墳を舒明初葬陵とする説は成立しえないだろう<sup>42)</sup>。



図6 植山古墳と2条の塀

## 5 蘇我入鹿の「小陵」はどこか

菖蒲池古墳か では、「大陵」とともに築造された「小陵」はどこか。「双墓」と呼ばれた以上、当然、その位置は「大陵」に近接していたはずであり、現状でそれにあたる可能性がある古墳を近辺に求めると、まず、小山田古墳の西北西約 100m の至近距離にある菖蒲池古墳が候補となる。

この古墳は、細長い玄室内に二つの家形石棺を縦に並べることで知られている。石棺はいずれも寄棟造の棟や柱を表現し、内面に漆を塗ったきわめて精巧な作りであり、ほかに類例を見ない<sup>43)</sup>。近年の発掘調査により、下段の一边約 30m の二段築成の方墳で、7 世紀中頃に築造されたこと、この時期の古墳としては破格ともいえる広い墓域を有したことが判明している<sup>44)</sup> (図 7)。

したがって、年代的には「小陵」にあてて支障はなく、相原嘉之氏は、これを蝦夷の「大陵」(小山田古墳)とともに造営された入鹿の「小陵」と推定する。そして、乙巳の変後に「大陵」は削平され、そこに眠るはずであった蝦夷も菖蒲池古墳に埋葬されたとみて、二つの石棺の主を蝦夷と入鹿とする<sup>45)</sup>。

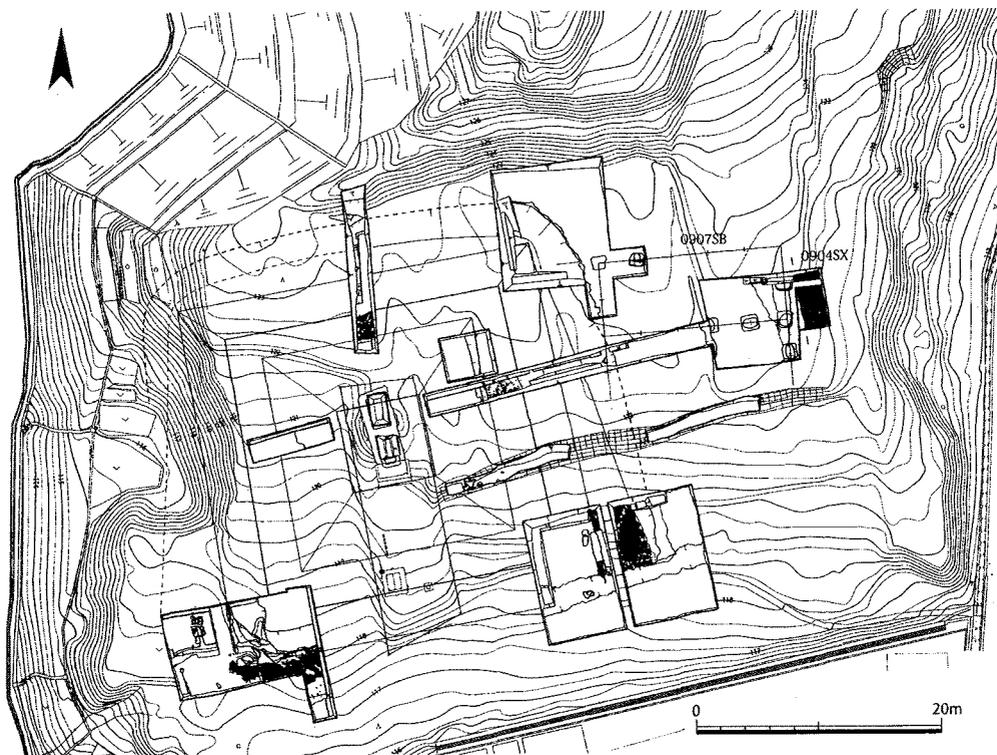


図 7 菖蒲池古墳

しかし、この想定には大きな問題がある。まず、両者の墳丘の構造がまったく異なる事実は看過できない。小山田古墳が基底部に緑泥片岩の板石を2段置き、上に室生安山岩の板石を積み上げるのに対して、菖蒲池古墳では、上段・下段とも石英閃緑岩を半加工した基底石を1段だけめぐらせる。その上は、土囊積みによる赤灰色系粘質土の盛り土の表面を削り出した化粧土とし、上段の墳丘裾の平坦面や前庭部、掘り割りの底面の一部には礫敷を施す。同時に築造され、「双墓」と称されたのであれば、両者の構造は基本的に共通するとみるのが自然であり、こうした点で菖蒲池古墳を「小陵」とするのは躊躇せざるをえない。

また、菖蒲池古墳の石室は、二つの石棺を縦に並べておさめることができるように、ひじょうに細長い形状を呈している。したがって、もともと二人の合葬を予定して築造されたとみてよい<sup>46)</sup>。当初は「大陵」に埋葬する予定であった蝦夷を、急遽合葬したものと考えがたいのである。

さらに、位置関係のうえで、この古墳が「大陵」と対になる「双墓」として妥当かどうかとも問題となる。小山田古墳が尾根の先端部に近い部分に築かれているのに対し、菖蒲池古墳はその北西の、尾根の基部に近い奥まった場所に立地している。墳丘や石室の位置も前後に大きくずれており、両者の位置関係は、「双墓」と呼ぶにふさわしいものとはどうい思われぬ。以上の点から、菖蒲池古墳を「小陵」とする説は成り立たないであろう。

**「小陵」の推定** では、入鹿の「小陵」はどこにあったのか。菖蒲池古墳の東西の一带は、1960年代に始まる宅地造成と学校建設によって大きく地形が改変されたため、当初の姿をとどめていない。しかし、菖蒲池古墳のすぐ南西には、北北西から南南東へのびる、短いながら明瞭な尾根が存在したことが、1948年2月に撮影された米軍の航空写真<sup>47)</sup>からわかる(図8)。また、1955年8月に奈良国立文化財研究所が撮影した航空写真(図9)や、それらにもとづき作成された1/1,000地形図にも明瞭に表れている(図10)。

この西側の尾根の南端部分はやや東西に広がり、小高くなっていたが、尾根の方向は、小山田古墳が築かれた東側の尾根と一致し、二つの尾根の南端は、尾根の主軸と直交する西南西―東北東にはぼ揃っていた。つまり、「大陵」が築造された尾根と対応するようなかたちで、その西側にも別の尾根がのび、両者は南端を揃えて、ともに幹線道路が通る前面の谷に面していたのである。当然、それらの尾根の先端部は、近接する幹線道路からもよく望めたであろう。この西側の尾根の先端部に、「小陵」を推定したい。尾根の幅からみて、小山田古墳と同規模の墳丘は想定できないので、「小陵」



図8 「大陵」「小陵」の推定と旧地形（1948年）

は文字どおり、東の「大陵」より小型の方墳であったはずである。

「小陵」の墳丘各辺は、「大陵」と同様、尾根と直交・平行する方向に築かれ、二つの墳丘は、西南西―東北東にほぼ軸線を揃えて並んでいたと考えられる。南側の道路や、さらにその南の丘陵から望めば、両者はまさしく「双墓」の様相を呈していたに違いない。地形上、「小陵」の場所はここ以外に求めえないだろう。

そして、乙巳の変後、「小陵」は「大陵」とともに削平されたと推定される。改新政府にとっては、「小陵」といえども、存在を認めて埋葬を許すべきものではありえず、同様に破壊の対象となったことは容易に想像される。なお、菖蒲池古墳の位置は「小陵」の推定北辺とわずか30～40mしか離れていないため、両者が併存したとは考えにくい。菖蒲池古墳は、「大陵」「小陵」が削平されたのち、これらの場所を避けるかたちで築造されたとみるべきであろう。

その後、「小陵」が想定される尾根は、1963年10月の時点で重機による削平が始まっていることが航空写真から知られる<sup>48)</sup>。さらに、1967年7月段階では、尾根全体が削平され、「小陵」の痕跡はこの世から完全に消失した<sup>49)</sup>。また、東側の尾根にも学校が建設されて、「大陵」の痕跡も地上からは失われ、それが再び姿を現すまで、半世



図9 「大陵」「小陵」周辺の旧地形（1955年）

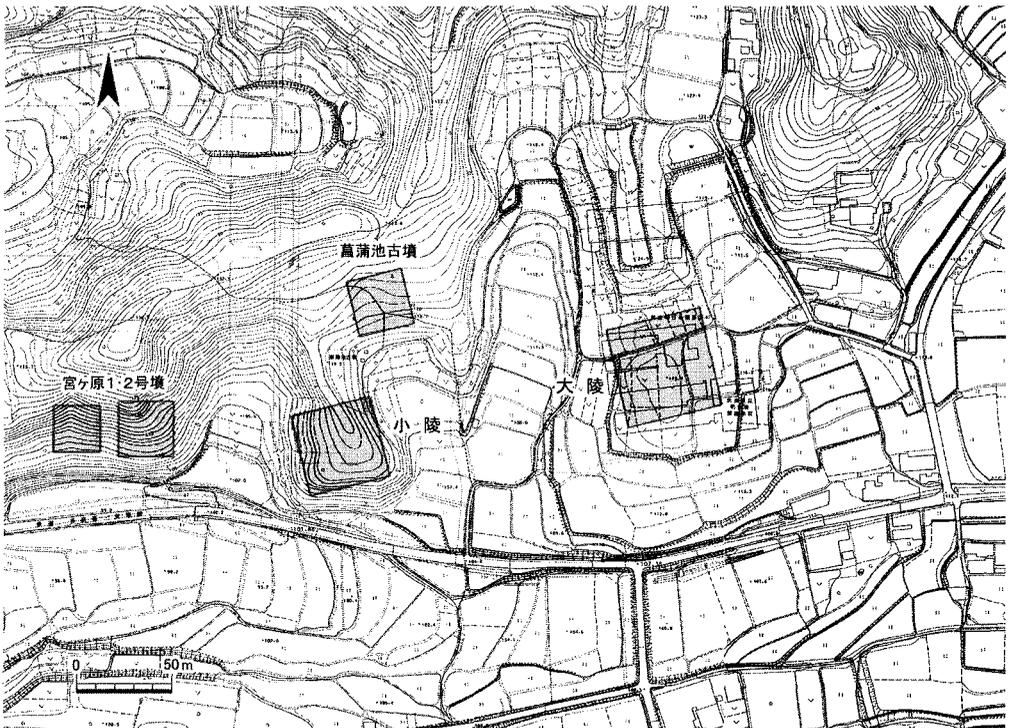


図10 「大陵」「小陵」の推定と周辺の古墳

紀近い歳月を要することになる。

**宮ヶ原1・2号墳の性格**　ここで、菖蒲池古墳から西南西約100mの至近距離にあり、東西に並ぶ宮ヶ原1・2号墳について触れておこう。これらは、墳丘の一边が30mと25mの方墳で、東側の1号墳がやや大きく、ともに南面する切石積みの横穴式石室をもつ(図11)。いずれも、石室の石材は大半が抜き取られていたが、石室規模はほとんど一致し(復元長約12m)、墳丘間の掘り割りを共有するなど、配置の規格性とあわせて、同時に計画・造営されたことをうかがわせる<sup>50)</sup>。そうした状況は、まさに「双墓」を彷彿とさせるものであり、竹田政敬氏は、7世紀中頃と推定される築造年代とあわせて、これらを、642年に見える蘇我蝦夷と入鹿の「まさのり今來の双墓」と推定する<sup>51)</sup>。

筆者も、以前はこの比定が成り立つ可能性が高いと考えていたが<sup>52)</sup>、墳丘規模が小さいことは気にかかっていた。「大陵」「小陵」という表現は、規模の大小を相対的に示すものとはいえ、一边約30mの方墳を「大陵」と称するのは不自然な感が否めなかったのである。今回、まさしく「大陵」にふさわしい規模の小山田古墳が発見されたことで、「今來の双墓」については本稿のように理解できることになったが、その場合、宮ヶ原1・2号墳の性格はどう考えるべきか。

遺構の状況からみて、この二つの古墳が、計画的に造営された「双墓」であること

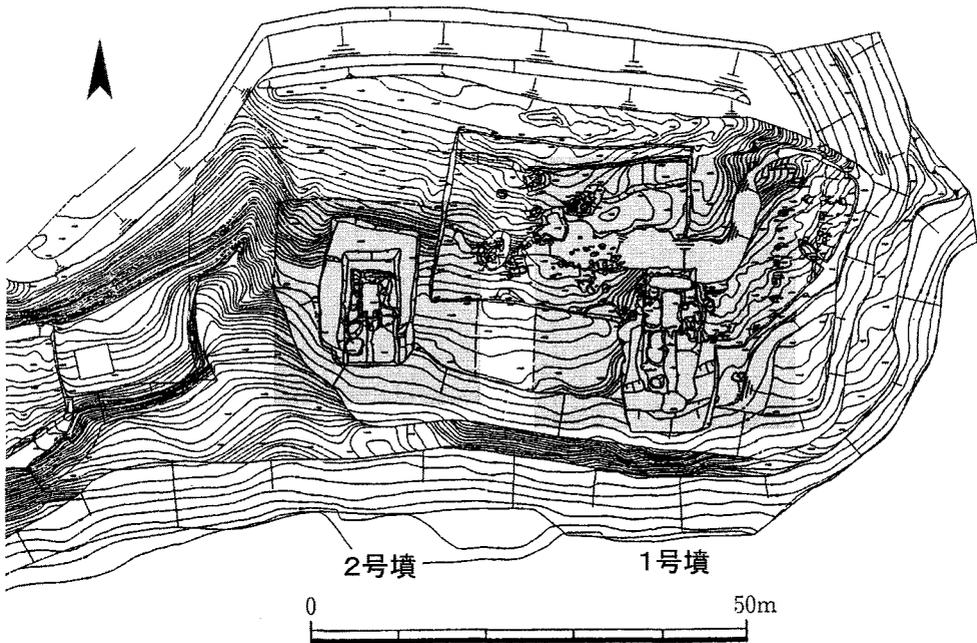


図11 宮ヶ原1・2号墳

は疑いない。また、その位置は蘇我系の墓域に含まれていたと判断されるので、築造年代が7世紀中頃とすれば、被葬者は蘇我氏の有力者のなかに求めうる公算が大きい。そこで想起されるのは、645年の乙巳の変後に、「蘇我臣蝦夷と鞍作が屍を墓に葬ることを許し」という記事である（皇極4年6月己酉条）。この「墓」が、生前に築造した「大陵」「小陵」とは考えられないことは先に述べた。では、彼らはどこに葬られたのか。

筆者は、これこそが、宮ヶ原1・2号墳であったと推定する。「大陵」「小陵」への埋葬は許されなかったものの、乙巳の変後、規模を大幅に縮小して、近接する蘇我氏の墓域内に彼らの「双墓」があらためて築造されたとみれば、疑問は氷解するのである。なお、宮ヶ原1・2号墳の墳丘は、東側の1号墳のほうが大きい。それは、「大陵」（小山田古墳）が東、「小陵」が西という位置関係と一致しており、規模を縮小した「双墓」の造営にあたって、もとの位置関係を踏襲したと考えてよい。1号墳には蝦夷、2号墳には入鹿が葬られたのであろう<sup>53)</sup>。

## 6 残された問題

**菖蒲池古墳の被葬者** 最後に、残されたいくつかの問題に言及しておきたい。まず、「大陵」と「小陵」が削平されたのちに築かれたとみられる菖蒲池古墳には、誰が埋葬されたのだろうか。

これについて、竹田政敬氏は、649年3月に謀反の嫌疑をうけて山田寺で自尽した蘇我倉山田石川麻呂くらやまだのいしかわまろとその長男興志こしを被葬者と推定する<sup>54)</sup>。たしかに、彼らの嫌疑が数日のうちには晴れ、謀反を疑った中大兄皇子は後悔して嘆き悲しんだという記事（大化5年3月是月条）や、石川麻呂が中大兄皇子の妃であった蘇我造媛みやつこひめ（遠智娘おちのいらつめ）の父にあたるという事実からも、追悼の意を込めて彼らを手厚く葬ったことは想像に難くない。

7世紀中頃と推定される古墳の築造年代もそれと整合しており、くわえて、二つの石棺がほかに例を見ない精巧なつくりである理由も、そう考えれば説明がつく。さらに、この時期としては破格といえる墓域をもち、当初から二人の合葬を予定したとみられること、その場所が蘇我系の墓が営まれた範囲に含まれることを勘案すれば、竹田氏が述べるように、菖蒲池古墳が蘇我石川麻呂と興志の合葬墓である蓋然性は高いといえよう<sup>55)</sup>。

**舒明初葬陵はどこか** 次に、小山田古墳を「大陵」とした場合、642年12月に舒明を滑谷岡に葬ったと見える彼の初葬陵はどこに想定できるのか。

これに関しては、「滑谷岡」の場所を詳らかにしえない以上、特定が難しいが、岸本直文氏は、岩屋山古墳を舒明初葬陵とする見方を提示している<sup>56)</sup>。この古墳の築造年代は、異論もあるものの<sup>57)</sup>、7世紀前半～中頃とする説が有力であり、年代的にはとくに矛盾はない。

また、岩屋山古墳は、梅山古墳（欽明陵）の南西約 0.3 km と近接した位置にある。両者は一連の陵墓域に属するとみてよく、岩屋山古墳の被葬者も、同様に天皇・皇族と考えるのが妥当である。精美な切石積みによる長大な横穴式石室をもつ点もそれにふさわしい。さらに、墳丘の上段部分は八角墳である可能性が高く、その場合、改葬陵（押坂陵）と墳形が一致する点も注意されよう。現状では確定できないとはいえ、被葬者にあてうる人物がほかに見当たらないこととあわせて、岩屋山古墳が舒明初葬陵であった可能性は充分にあるのではないか。

**都塚古墳の被葬者** 小山田古墳発見の報道に数ヵ月先立つ 2014 年 8 月、飛鳥で初めてピラミッド状の方墳が確認されたというニュースが世間をにぎわせた。石舞台古墳の南南東約 0.4 km にある都塚古墳が、階段状の石積みをともなう墳丘をもつことが判明した、と大きく報じられたのである。

この古墳は、墳丘の一边が 41～42m のほぼ正方形で、横穴式石室が南に開口する。墳丘各段の石積みはかなり粗雑なため、「ピラミッド状」という表現が正鵠を射ているかどうかは疑問もあるが、特殊な形状であることは間違いない。そして、被葬者は蘇我稲目とする説が有力である、というのが新聞各紙の論調であった。築造年代については、その後刊行された報告書で、6 世紀後半を中心に 7 世紀初頭までの年代幅が想定されている<sup>58)</sup>。

しかしながら、本稿でも論じたように、蘇我稲目の墓は五条野丸山古墳とみるべきであり、571 年に没した欽明が前方後円墳（梅山古墳）に葬られている点からも、その前年の 570 年に死去した蘇我稲目の墓は前方後円墳と考えるほうが自然である<sup>59)</sup>。また、石舞台古墳や都塚古墳が位置する一帯は、蘇我馬子の代以降は彼の邸宅が営まれ、その勢力圏に含まれたとはいえ、これに先立つ稲目の代に、蘇我氏の勢力がこの地に及んだ形跡は確認できない。都塚古墳の築造年代は、稲目墓（五条野丸山古墳）と馬子墓（石舞台古墳）の間に位置づけるのが正しく、都塚古墳の被葬者を蘇我稲目とする説は成立しえないだろう。

ただ、「嶋大臣」と呼ばれた馬子が飛鳥川のほとりに邸宅を構えた時期は詳らかでないものの、都塚古墳がそれ以降に築造されたとすれば、被葬者は蘇我氏の有力者であった蓋然性が大きい。その場合、候補の一人となるのは、堅塩媛と同じく稲目の娘

であり、欽明の妃となった小姉君おあねのきみである<sup>60)</sup>。彼女は堅塩媛の同母妹であって、やはり生没年は不詳ながら、穴穂部間人皇女あなほべのはしひとのひめみこ（用明の太后）や穴穂部皇子あなほべのみこ、泊瀬部皇子はつせべのみこ（崇峻）ら四男一女を生んでいる。世代や堅塩媛の妹ということを見ると、年代的にも被葬者とみて矛盾はなく、都塚古墳は彼女の墓として築造された可能性が高いのではなかろうか。

## 註

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所『小山田遺跡第5・6次調査 現地説明会資料』2015年（以下「現地説明会資料」と略記）。鈴木一議・清水康二ほか「小山田遺跡第5・6次調査」『奈良県遺跡調査概報2014年度（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、2016年（以下「調査概報」と略記）。
- 2) 笠野 毅「舒明天皇押坂内陵の墳丘遺構」『書陵部紀要』第46号、宮内庁書陵部、1995年。
- 3) 2015年1月15日の小山田遺跡の新聞報道における同氏の各紙でのコメント。
- 4) 相原嘉之氏も「小山田古墳」の呼称を用いている（相原嘉之「甘樫丘をめぐる遺跡の動態—甘樫丘遺跡群の評価をめぐる—」『明日香村文化財調査研究紀要』第15号、明日香村教育委員会、2016年。
- 5) ささまざまな表記があるが、本稿では、遺跡名を除き、この皇極3年（644）11月条に見える「甘樫岡」に統一する。
- 6) 奈良国立文化財研究所「甘樫丘東麓の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 25』1995年。奈良文化財研究所「甘樫丘東麓遺跡の調査」『奈良文化財研究所紀要 2006』～『奈良文化財研究所紀要 2014』2006～2014年（各年度）。
- 7) 橿原市教育委員会『史跡 植山古墳』橿原市埋蔵文化財調査報告第9冊、2014年。
- 8) 竹田政敬「五条野古墳群の形成とその被葬者についての憶説」『考古学論攷』第24冊、奈良県立橿原考古学研究所、2001年。
- 9) この点については、相原嘉之氏が、やや対象範囲を広げて詳述している。相原嘉之「甘樫丘をめぐる遺跡の動態」前掲註4。
- 10) 小澤 毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003年、72～114頁（初出1995年）。
- 11) 豊浦寺から南東至近の地にある平吉遺跡ひきちも、その一部と推定される。奈良国立文化財研究所「平吉遺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 8』1978年。
- 12) 陵墓調査室「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号、宮内庁書陵部、1994年。
- 13) 森浩一『古墳の発掘』中公新書、1965年、148～156頁。
- 14) 高橋照彦「欽明陵と檜隈陵—大王陵最後の前方後円墳—」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学友の会、2005年。高橋照彦「欽明陵と敏達陵を考える」白石太郎編『天皇陵古墳を考える』学生社、2012年。岸本直文「五条野丸山古墳は

- 欽明天皇陵か』『古代史研究の最前線 天皇陵』洋泉社、2016年。
- 15) 後述するように、蘇我蝦夷と入鹿の墓は「大陵」「小陵」と称されたが、それは、彼らの専横なふるまいと無礼を非難するなかで用いられており、『日本書紀』本来の用法とは背馳するものである。逆に、「墓」を「陵」と称したことが問題とされ、記事のなかで両者を書き分けているのは、それらが截然と区別されていたことを明示する。
- 16) 小澤 毅「三道の設定と五条野丸山古墳」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所、2002年。  
和田 萃「飛鳥の陵墓—檜隈坂合陵の再検討—」白石太一郎編『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館、2005年。
- 17) 白石太一郎「五条野丸山古墳の被葬者をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 12』大阪府立近つ飛鳥博物館、2009年。
- 18) 相原嘉之「蘇我三代の遺跡を掘る一邸宅・古墳・寺院—」西川寿勝ほか『蘇我三代と二つの飛鳥—近つ飛鳥と遠つ飛鳥』新泉社、2009年。相原嘉之「甘樫丘をめぐる遺跡の動態」前掲註4。
- 19) 管見のかぎり、この点に関して、「五条野丸山古墳＝欽明陵」説の立場からの明快な説明に接したことはない。自説に都合の悪い事実から目をそむけたままでの強弁は、学説としての妥当性を欠き、逆に弱点を露呈するものではないか。
- 20) 安本美典「欽明天皇陵の再検討」『季刊邪馬台国』第48号、梓書院、1992年。小澤 毅「三道の設定と五条野丸山古墳」前掲註16。小澤 毅「飛鳥の都と古墳の終末」『岩波講座 日本歴史』第2巻 古代2、岩波書店、2014年。ほかにも、蘇我稻目を五条野丸山古墳の被葬者と想定する論者は枚挙にいとまがない(福尾正彦「なぜ前方後円墳は終焉したのか」『AERA Mook 古代史がわかる。』朝日新聞社、2002年。竹田政敬「各地の終末期古墳 大和」『季刊考古学』第82号、2003年。和田 萃「飛鳥の陵墓」前掲註16。大脇 潔「六～七世紀の王宮と初期寺院」『終末期古墳と初期寺院の造営を考える』藤井寺市教育委員会、2006年。相原嘉之「蘇我三代の遺跡を掘る」前掲註18。相原嘉之「甘樫丘をめぐる遺跡の動態」前掲註4。近江俊秀『道が語る日本古代史』朝日新聞出版、2012年、167～168頁など)。
- 21) 小澤 毅「天皇陵は同時代最大の古墳だったのか」『季刊邪馬台国』第100号、梓書院、2008年。小澤 毅「飛鳥の都と古墳の終末」前掲註20。
- 22) 墳丘長は、継体陵とみて誤りない今城塚古墳が約190m、安閑陵と宣化陵に治定される高屋築山(高屋城山)古墳と鳥屋ミサンザイ古墳がそれぞれ約121m、約138mである。後二者については治定の当否が確定していないが(筆者は、現行の治定で問題ないと考え)、その墳丘規模が欽明陵(梅山古墳、約140m)と近似する点は注目されよう。いずれにしても、6世紀の大王陵で墳丘長が200mに達する例はなく、明らかに縮小する傾向にある。
- 23) 相原嘉之「甘樫丘をめぐる遺跡の動態」前掲註4。
- 24) 竹田政敬「五条野古墳群の形成とその被葬者についての憶説」前掲註8。小澤 毅「三道の設定と五条野丸山古墳」前掲註16。相原嘉之「甘樫丘をめぐる遺跡の動態」前掲註4。

- 25) 福尾正彦「八角墳の墳丘構造—押坂内陵・山科陵・檜隈大内陵を中心に—」『牽牛子塚古墳発掘調査報告書—飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査—』明日香村教育委員会、2013年。
- 26) 「阿不幾」を「あおき」と訓ずる例が多いが、「あふぎ（扇）」が正しい（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館『飛鳥の王陵』1982年）。
- 27) 西光慎治「今城谷の合葬墓」『明日香村文化財調査研究紀要』第2号、2002年。西光慎治「飛鳥、四つの皇統譜—梅山古墳、カナヅカ古墳、鬼ノ俎・雪隠古墳、野口王墓古墳—」西川寿勝ほか『蘇我三代と二つの飛鳥—近つ飛鳥と遠つ飛鳥』新泉社、2009年。
- 28) 明日香村教育委員会『牽牛子塚古墳発掘調査報告書—飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査—』2013年。
- 29) 斉明陵については、699年に「<sup>おちのみさぎ</sup>越智山陵」を営造・修造した記事があり（『続日本紀』文武3年10月甲午条、辛丑条）、今尾文昭氏と白石太一郎氏は、岩屋山古墳に葬った彼女を、このとき牽牛子塚古墳に改葬したとする（今尾文昭『律令期陵墓の成立と都城』古代日本の陵墓と古墳2、青木書店、2008年、153～159頁〔初出1998年〕、164～189頁〔初出2005年〕。白石太一郎「牽牛子塚古墳と岩屋山古墳—考古学からみた斉明陵—」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報15』大阪府立近つ飛鳥博物館、2012年）。しかし、牽牛子塚古墳の前面で小型の横口式石槨が発見された事実は、それが大田皇女の墓に該当し、667年の記事に見える「小市岡上陵」が牽牛子塚古墳にほかならないことを明示している。『続日本紀』の記事があくまでも修造であって改葬ではないこと、岩屋山古墳の立地は「小市岡上」にそぐわず、牽牛子塚古墳こそがふさわしいこともこれを裏づける。
- 30) 西光慎治「欽明天皇檜隈坂合陵・陪冢 カナヅカ古墳の覚書」『明日香村文化財研究紀要』創刊号、明日香村教育委員会、2000年。
- 31) 吉備姫王（吉備嶋<sup>きびのしまのすめみおやのみこと</sup>皇祖母命と呼ばれた）の父は、堅塩媛の子の桜井皇子であり、非蘇我系とはいえないが、彼女を含めて、<sup>てんじ</sup>齊明・孝徳、さらに天智・天武と世代が下るにつれ、蘇我氏の血は薄まっていく。
- 32) 現在の「吉備姫王墓」治定地は古墳とは認めがたい。
- 33) 白石太一郎『古墳と古墳群の研究』塙書房、2000年、37～96頁（初出1981年）。白石太一郎「牽牛子塚古墳と岩屋山古墳」前掲註29。
- 34) 前掲註29参照。
- 35) 相原嘉之「飛鳥の道路と宮殿・寺院・宅地」『条里制・古代都市研究』通巻15号、条里制・古代都市研究会、1999年。
- 36) 和田 萃『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上、塙書房、1995年、321～362頁（初出1981年）。
- 37) 前田晴人「蘇我蝦夷・入鹿の『双墓』について」『日本歴史』第631号、吉川弘文館、2000年。
- 38) 室生安山岩の板石積みが共通することは、被葬者を同一とみる理由にはならない。余った資材の利用を含めて、年代がほぼ一致することを示すものであろう。

- 39) 和田 萃『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上、321～362 頁、前掲註 36。
- 40) 相原嘉之「甘樫丘をめぐる遺跡の動態」前掲註 4。
- 41) 橿原市教育委員会『史跡 植山古墳』前掲註 7。
- 42) なお、方墳から八角墳への変更を目的として改葬したという見方もありうるが、先述の推古陵は、初葬陵（植山古墳）、改葬陵（山田高塚古墳）ともに方墳（長方墳）である。また、同じく改葬された用明も、初葬陵の「磐余池上 陵」<sup>いわれのいけへのみさぎ</sup>（用明 2 年 7 月甲午条）<sup>たにくび</sup>が谷首古墳だとすれば（高橋照彦「欽明陵と檜隈陵」前掲註 14）、やはり改葬陵（春日向山古墳）を含めて方墳となる。改葬という行為が、墳形の変更を目的としたわけではないことは明白である。
- 43) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館『飛鳥時代の古墳』1979 年。河上邦彦「菖蒲池古墳の石室の系譜」『古文化論叢—伊達先生古稀記念論集—』伊達先生古稀記念論集刊行会、1997 年。橿原市教育委員会『菖蒲池古墳』橿原市埋蔵文化財調査報告第 10 冊、2015 年。
- 44) 橿原市教育委員会『菖蒲池古墳』前掲註 43。
- 45) 相原嘉之「甘樫丘をめぐる遺跡の動態」前掲註 4。
- 46) 河上邦彦「菖蒲池古墳の石室の系譜」前掲註 43。竹田政敬「五条野古墳群の形成とその被葬者についての憶説」前掲註 8。
- 47) 国土地理院空中写真（USA-M792-72、1948 年 2 月 20 日撮影）。以下、とくに断らない場合は、同機関が提供する地図・空中写真閲覧サービスによる。
- 48) 国土地理院空中写真（MKK638X-C2-11、1963 年 10 月 8 日撮影）。この時点で、小山田古墳が存在した尾根は、まだ旧来の地形を保っている。
- 49) 国土地理院空中写真（MKK675X-C6-23、1967 年 7 月 23 日撮影）。
- 50) 竹田正則「五条野宮ヶ原 1・2 号墳の調査」『かしはらの歴史をさぐる 9』橿原市千塚資料館、2001 年。
- 51) 竹田政敬「五条野古墳群の形成とその被葬者についての憶説」前掲註 8。
- 52) 小澤 毅「三道の設定と五条野丸山古墳」前掲註 16。
- 53) 宮ヶ原 1・2 号墳は、調査後まもなく、宅地造成によって湮滅に帰した。これらが、学術的評価の定まらないうちに、十分な協議もないまま姿を消したのは痛恨の極みである。開発行為に対する文化財行政の関わり方を含めて、大きな問題であろう。
- 54) 竹田政敬「五条野古墳群の形成とその被葬者についての憶説」前掲註 8。
- 55) ただし、この古墳の掘り割りには藤原京期には埋められ、官衙関係とみられる掘立柱建物<sup>（橿原市教育委員会『菖蒲池古墳』前掲註 43）</sup>が建てられる。被葬者を持統天皇の祖父にあたる蘇我倉山石川麻呂とした場合、そうした状況をどう考えるかが問題として残る。
- 56) 岸本直文「後・終末期古墳の『治定』問題」『季刊考古学』第 124 号、雄山閣、2013 年。
- 57) 今尾文昭氏と白石太一郎氏は、岩屋山古墳を 661 年に死去した斉明の初葬陵にあてるが（今尾文昭『律令期陵墓の成立と都城』153～159 頁、164～189 頁。白石太一郎「牽牛子塚古墳と岩屋山古墳」）、この比定は成立しがたい。前掲註 29 参照。
- 58) 明日香村教育委員会・関西大学文学部考古学研究室『都塚古墳発掘調査報告書—飛鳥の

多段築墳の調査一』2016年。

59) 585年に没した敏達は、591年に母の石姫の「磯長陵」に合葬されている(崇峻4年4月甲子条)。おそらく改葬であろうが、これを現治定陵の太子西山古墳(大阪府南河内郡太子町)にあてることに異論は少ない。とすれば、敏達も前方後円墳に葬られたことになる。

大王陵でも、方墳に移行するのは次の用明からとみてよい。

60) 小笠原好彦氏がこうした考えを提示している(同氏から筆者宛の私信による)。

## 挿図出典

図1: 筆者撮影(奈良県立橿原考古学研究所協力)。

図2: 奈良文化財研究所1/1,000地形図「川原」「五条野」「見瀬」に加筆。

図3: 奈良国立文化財研究所空中写真(25\_02379、1955年8月4日撮影)。

図4: 国土地理院空中写真(USA-M792-72、1948年2月20日撮影)に加筆。

図5: 黛弘道編『年表日本歴史』第1巻、筑摩書房、1980年、185頁挿図を一部改変。

図6: 橿原市教育委員会『史跡 植山古墳』前掲註7、139頁図118を改変。

図7: 橿原市教育委員会『菖蒲池古墳』前掲註43、87頁図76を改変。

図8: 国土地理院空中写真(USA-M792-72、1948年2月20日撮影)に加筆。

図9: 奈良国立文化財研究所空中写真(25\_02380、1955年8月4日撮影)。

図10: 奈良文化財研究所1/1,000地形図「川原」「五条野」に加筆。

図11: 竹田正則「五条野宮ヶ原1・2号墳の調査」前掲註49、24頁図17に加筆。

後記 本稿は、2015年3月28日に奈良県立橿原考古学研究所で開催された講演会「『飛鳥・藤原の宮都とその関連遺跡群』を知る・学ぶ・活かす」における講演「飛鳥から藤原京へ」の後半部分を文章化したものである。それとほぼ同じ内容は、三重大学人文学部公開講座(「飛鳥の巨大古墳の被葬者を探る」2015年12月2日、三重大学人文学部)や、名古屋古代史研究会(「飛鳥の巨大古墳の被葬者をめぐって」2015年12月12日、名古屋大学文学部)ほかでも発表した。文章化にあたっては、その後刊行された報告書や論文などにも言及したが、論旨および内容は変更していない。

講演の準備や本稿の作成にさいしては、奈良県立橿原考古学研究所と奈良文化財研究所のお世話になった。また、相原嘉之氏、稲田登志子氏、入倉徳裕氏、大脇潔氏、小笠原好彦氏、岸本直文氏、西光慎治氏、鈴木一義氏、竹田政敬氏、玉木学恵氏、松井一晃氏、森本晋氏から多くのご教示をいただいた。篤く感謝の意を表したい。

(おざわ つよし 三重大学人文学部)